

沖

4
2018

俳句雑誌【おき】



木目時計

能村 研三

金子兜太さんを悼む

北欧の木目時計やあたたか

画数の多き字記し黄沙降る

三月菜摘むや西より雨予報

財貨など触れぬ遺言朧濃し

霾ぐもりひらひらと持つ処方筆

剥製のほろろ打つやう春の雷

別府・宮崎四句

とめどなく霞まじりの湯のけむり

運の石逸れて春潮喜ばす

海うらら鬼の洗濯岩怠け

花いまだ妻にうさぎの平癒護符

金子兜太さんが亡くなった。私が最後にお目にかかったのは昨年十一月二十三日、現代俳句協会の創立七十周年の祝賀会で、特別功労賞をお受けになられ、「ありがとう」と自席で大きな声で述べられた後、当日の参会者の熱い声援に応えられて故郷の「秩父音頭」を披露された。兜太さんは大正八年の生まれ。登四郎は明治四十丁四年の生まれで、年齢は九歳離れているが、共に戦後俳句の同時期の作家として肩を並べたことは大きな意義がある。中でも昭和三十一年第五回現代俳句協会賞を登四郎と同時に受賞している。その後、俳人協会が設立され、二人は別の協会で活動することになったが、沖誌には記念号などで度々執筆をいただいた。

登四郎は九十歳、兜太さんは九十八歳で亡くなったが、共に亡くなる直前まで俳句に全身全霊をかけたことは素晴らしい。

私も兜太さんとの思い出がたくさ

んある。数年前、NHK学園の伊香保大会で講演をされた兜太さんと、選者として参加した私は帰りの電車で伊香保から熊谷まで一緒に、車中いろいろなお話をさせていただいた。そんな時にも常に真摯に話を聞いて下さり、気どらない優しさは今でも忘れることができない。

また日暮里の本行寺で行われた一茶の俳句大会で一緒にした時は、「あなたも登四郎さんに似てきたな」と声をかけて下さった。

市川でも、詩人の宗左近さんと交友があったのでお二人の対談や、宗さんの記念講演など度々来市していただいた。

一昨年の六月、宗左近詩碑が市川の里見公園に建立され、除幕式に兜太さんが駆け付けて下さった。この時も体調を心配されながら参加いただいたが、二人の熱い友情が故のことと思つた。

今頃は泉下で宗左近や登四郎と詩歌論を戦わせていることだろう。心よりご冥福をお祈りしたい。

能村 研三

吃水線

森岡 正作

白魚の千の目寄せて量らるる
薄氷にひと夜の風の擦過傷

去年の今頃、「湖北の旅」という言葉に魅かれて琵琶湖周辺を歩いた。その時偶然にも小さな魚屋の店先で、今獲って来たという鮒を、桶から十数匹まな板の上に取り出すところを見ることができた。鮒鮓にでもするのであるうか。生々しい銀鱗の輝きに、鮒釣りに夢中になった少年の顔を思い出していたが、「ふと登四郎先生の〈春鮒を頌ち〉貧交十年まり」という句が浮かんできたのであった。

吃水線身にあるごとく春の風邪
春塵を洗ひ流して象の鼻
辞令なく引く白鳥を眩しめり
引越しの荷に降りしきる花ミモザ
受験子の背中まぶしみ出勤す

先生と翔先生は市川中学校の同僚教員として、それまで十年ばかり親しく過ごしていた。鮒はきつと他の同僚から買ったものではなかるうか。それを「林さん、あなたも持つていけよ」と言つて頷けてあげたに違いない。世も貧しく教員の薄給時代の心暖まる句である。その後俳句の世界へと続き、更に五十年余りに亘る深い交わりになろうとは思ひもしなかつたことと思う。両先生に乾杯である。

森岡 正作

蒼茫集

寒 月 蝕

上 谷 昌 憲

寒 鴉

梅 村 寸 みを

* 寒月蝕慙悸のいるとなりゆくも
人のみが月蝕仰ぐ寒波かな
鬼瓦ふはりと踏まへ寒鴉
獺祭アインシュタイン舌を噛み
鶯餅喜寿と傘寿の姉妹にて
立春寒波やたら元気な鼓笛隊

風呂吹やしづかな雨の夜となる
脳天よりかぶる寒垢離浄め水
寒泳のかがやく肉体水を出づ
* 男の意地は却つて邪魔や寒鴉
如月の山の木を樵るひびきかな
初雲雀周防の山河凡ならず

鋼 の 板

辻 美 奈 子

月 蝕

秋 葉 雅 治

* 関東平野鋼の板のごとく冷ゆ
蹠が大寒の岸濡らしけり
踏ん張れるポストの上の雪達磨
あかがねの凍つる球体月の蝕
降る雪や訃報に悔は追ひつけず
節分の鬼の居場所を聞に聞く

* 春待つや月を蝕む星に棲み
蝕半ば懐へきれざる冬の風呂
確定申告耳まで被ふ毛糸帽
楚々と生く藁屋住まひの菰牡丹
あすの山路望めば雪解いよよ急
鷹鳩と化すや婦唱の夫随なる

波の起伏

能美昌二郎

待春の息少しづつ窓を拭く
青天へ吸ひ込まれゆく蒼鷹
寒月を残し終バス発ちにけり
龍の吐く寒九の水で漱ぎけり
* 水鳥は波の起伏をたどりをり
鍵穴に鍵の合はぬ日寒の入

葳癖

松井志津子

百年の葳癖を言ふ寒仕込
岸の鴨やすらふ時も水に向く
* 絶海の色を思へり雪後の天
春立てり鬣伏せし波頭
輪翔は別れの儀式白鳥去る
臙濃し「小さくなつたねお母さん」

耳と鼻と

千田百里

相伝の雑煮遺伝の酒豪なり
定位置に耳と鼻ある寒夜かな
クツキー缶の小部屋さまざま春を呼ぶ
春が来る長き耳輪を揺らしくる
* 建国日走者はがねの脚をもて
どこ行くも奈落おぼろの新宿は

さきがけて

柴崎英子

時戻す音さくさくと落葉踏む
臘梅のいよいよ透きて七七忌
春の夜とろろ昆布を椀に溶き
* 大股に歩き春愁捨てて来る
城垣皇居句の反りきはやかに春立てり
さきがけて梅林坂の濃紅梅

余寒

大畑善昭

すれ違ふとき水の香の雪女
常ならぬ余寒に長居されてをり
* 小気味よき雷鳴雪を掻きをれば
家々に雪がもつこり春ながら
よく励みつつ輝を嘆く妻
除雪機を修理に出して戻るまで

龍太の忌

広渡敬雄

* 音のなき潮のうねりの淑気かな
妻も吾も筑前育ち丸き餅
醸すとは紅うつすらと冬木の芽
二三枚鱗光れり凝鮎
雪吊のいまだ緩まず龍太の忌
春焚火目に沁みにけり父のこと

星の木

望月晴美

星の木になりきつてゐる冬けやき
裸木のいま熟年か壮年か
ぬげるもの脱ぎし身軽さ冬木の芽
* 育てゐるごと水餅の水替ふる
雪肌に触れスキーヤーやはらかし
シユプールを描くや風邪など寄せ付けず

磐石

楠原幹子

磐石や裸木の朴はればれと
蕪鮮うまし常温の酒もまた
* 東京をてんやわんやに雪降り
雪解川濁りて力みなぎらす
梅香る身の笹ふつと緩びけり
暖かや人が通れば道できて

潮鳴集



かちんこちん

佐々木よし子

* 日脚伸ぶ自転車に積む培養土
井戸神の繭玉かちんこちんかな
全制動かけ白鳥の着氷す
白鳥翔ぶたそがれ深き五頭の嶺々
禅林に剪る音ひびく寒椿

くれなゐ

菊地光子

* 切株の芯のくれなゐ建国日
満作のシュレッダー掛けしやう開く
肩肘を張ることもなし春シヨール
朝市に日を呼ぶ白菜明りかな
日脚伸ぶひねもす軋む船溜り

臨時の駅

齊藤 實

畑中に臨時の駅や梅二月
蛇穴を出るや神主白の衣
* 春灯の届かぬ先を惜しみけり
車庫入れの尾灯分だけ暖かし
春疾風さうか手品の種明し

森は語り部

大沢美智子

* 二(よたか)の目沼面にはかに波立てり
節分鰯藁一本の燃え残る
下萌や山羊の仔撫づるための列
春月や水噴くさまに大樫
森は語り部朽葉の嵩のあたたかし

白菜

平城静代

白菜の断面十二単かな
寒牡丹種火のごとき芽を宿し
かくし立てなきこと清し冬樺
* 寒行の声に震へる幣真白
着ぶくれて争ふことのなくなりぬ

梵 字

平松うさぎ

海鳴りや肩より冷ゆる羽越線
千手観音千の手のひら暖かし
* 春の蝶G線上を行き来せり
貝寄風や接がれて壺となる破片
空海の梵字浮きくる雨水かな

未来の子

鈴木一広

* ふらここの子らは空飛ぶ未来の子
関の声繰返すごと雪しまく
隠したさことこんなにも春の雪
蛇穴を出づれば世間は喧騒ぞ
逆上がり春野の空の裏返る

車輪止め

竹内タカミ

冬の森ひとりになつてしまひけり
耐ふるとは撓ふことかも竹に雪
大枯野ひかりを踏みて子らの来る
* 皆既月食観つつ子の言ふ冬の星
冬銀河^{銀河}最北端の車輪止め

春を待つ

小川流子

* 尺八の尖る高音寒早
白菜の眠りを覚ます二つ割
春を待つ背中合せの寺社
ピクルスの色とりどりや春隣
ホットケーキの弾力少し日脚伸ぶ

寒 紅

多田ユリ子

* 寒紅を引いて言ふべきこと決まる
サラダ盛る真白き皿や寒の明
美しき手毬魅椀に小正月
夕東風や筑波嶺淡きくれなゐに
新しき箸の香建国記念の日

飛鷹選評



能村 研三

なづな打ついのちの緑敲くかに 栗坪 和子

「なづな打つ」とは七草粥に入れる若菜を刻むこと。「七草打つ」「七草はやす」とも言い、正月七日の朝に、包丁の背や搗粉木などでまな板の若菜をたたく。その際「七草なすな、唐土の鳥が、日本の土地へ、渡らぬさきに」などと唱える。この行事は年頭の鳥追い、つまり農作物を襲う鳥を年頭にあらかじめ追い払うまじないである。中七の「いのちの緑」の措辞が新年に相応しい美しい色を添え、一句の言葉遣いが綺麗に流れている。先師の句に「へのちなりけり元旦の粥の膜ながれ」がある。

閉め切つて四次元時空白障子 村上 葉子

障子は日本の家屋にはなくてはならない建具である。格子に組んだ木の枠に白紙を張ったものを、ついでたてやすまど区別して、「明り障子」と呼び白障子のふつくらとした柔らかい光線の加減こそ、日本人の座敷文化の核をなすものである。障子越しに入る光はデリケートで柔らかい。縦横高さのある空間が三次元の空間だとすれば、四次元の空間はこれに時間の概念

を加えたものである。いずれにせよ真新しく張り替えられた白障子を閉め切ると不思議な空間が出来上がる。

立春大吉果樹園に猫車 齊藤 陽子

齊藤さんは、温暖な館山で枇杷栽培のお仕事をされている方。枇杷は初冬に花をつけ、寒さの中で実を結ぶ。寒波が襲来した時などはストープを焚いて果実を守るそうだ。立春の音が聞かれると、次第に温かくなってくる兆しが見えることから生産者としてはほっとする時である。納屋の戸にも張られた「立春大吉」を見ながら猫車が出され、これからの作業もいよいよ本番である。

子は恋の取札遠く飛ばしけり 稗田 寿明

百人一首にはときめく恋、せつない恋、情熱的な恋など恋にまつわる名歌が詠まれている。いつまでも子どもと思っていたが、恋の句を詠んだ取り札を取るすばやさに驚いた。と同時に子ども自身に恋愛への気持が芽生えてくることを感じた瞬間でもあった。

大寒を堪へて優しき埴輪の眼 岡本 秀子

埴輪は、古墳時代を代表する遺物で、その起源は、弥生時代後期に墓に供えた土の器である。埴輪の一番の特色は眼である。あの眼が、優しく素朴な人物像を再現している。大寒の頃は一年中で一番寒い時期だが、古墳時代は今より寒い気候だったはず、その寒さにも堪えて優しい顔の表情であるのが不思議だ。

沖作品



* なづな打ついのちの緑敲くかに 栗坪 和子

戦の話しづかに聞いて年酒かな
もう山の影がとどいて水仙花
はるかより海光降り白障子
節分や梁に鑄びたる鯨銚
初雪やうすくれなみの両の耳

市川市 栗坪 和子
千葉 村上 葉子

* 閉め切つて四次元時空白障子
見えぬもの追ひかけてきし冬の虹
寒林へ羽衣かけに行つたきり
雪催余呉湖の宿の武者話
折り摘みし花白々と枇杷の山

齊藤 陽子

* 立春大吉果樹園に猫車
マラソンの砲一発や寒明くる
潮騒の神前煙と年始酒

能村研三選

* 子は恋の取札遠く飛ばしけり 稗田 寿明

事件をくりかへし聞く日向ぼこ
三つ折りのそろふ手紙や春隣
臘梅の灯る日向となりにけり
走り根の土割る力冬ざるる
射場を拭くことがはじまり初稽古

岡本 秀子

* 大寒を堪へて優しき埴輪の眼
寒禽の全容みせて枝移る

埼玉 黒岩武三郎

* 天穹の青を極めて寒波急
立春の噴水硬ききらを撒き
春來たる上野に人の湧くごとし
放課後のチューバの音や日脚伸ぶ